

〈翻訳〉カレル・チャペック

『プラグマティズムあるいは実践的生活の哲学』(中)

群馬大学教育学部教授 村上隆夫

文献解題と短かい研究ノート(2)

前稿に続きカレル・チャペック著『プラグマティズムあるいは実践的生活の哲学』の翻訳を提供する。使用したテキストは同一のもので、Karel Čapek, *Pragmatismus čili filosofie praktického života*, Olomouci: Votobia, 2000である。ただしテキストについて若干の補足説明をせねばならない。

訳者は、チャペックの美学論文を求めて彼の『大学研究論文集』Karel Čapek, *Univerzitní studie*, Praha: Československý spisovatel, 1987のテキストを千野亜矢子氏の御好意によって入手することができた。この本には『プラグマティズム』も収録されていたが、それは一九二五年の第二版であって、それには「五つの補遺 (Pareto dodatku)」と題される補遺が収録されていた。巻末の「編集ノート (Ediční poznám-

ka)』によれば、この補遺は共産主義に関する議論を念頭に置いて執筆されたもので、その点でも重要なものと思われる。したがって当初予定の二回分載を変更して三回とし、次稿で補遺を訳出してテキストの完全を期したい。

なおこの『大学研究論文集』には、『プラグマティズム』の他に、『最新の美学における方向 (Směry v nejnovější estetice)』(一九一三年)と『美学的関係と歴史芸術 (Poměr estetiky a dějin umění)』(一九一四年)と『造形芸術を考慮した美学における客観的方法 (Objektivní metoda v estetice se zřetěním k výtvarnému umění)』(一九一五年)が収録されている。これらの美学論文のうち特に最後のものはチャペックの小説の構成原理とされているキュビズムの美学と彼のプラグマティズムとの内的な関連を明らかにしていると思われる、いつか折をみて翻

訳を試みたいと考えている。

プラグマティズムあるいは実践的生活の哲学 K・チャペック

六 ジョン・デューイ*

U・J・デューイはプラグマティズムと機能主義的心理学および発生的論理学との繋がりを最も鮮明なたちで表明している。新しい思想の出発点はダーウィンである。ようやくダーウィンの後で哲学的思考は「絶対的な永遠性」という観念に関して転回したのである。たんに完全なる欠落と非存在の象徴であった万物の変化と生成に基づいて思索は、構造と機能の様な設計や堅固な形式や最終的な原因を消耗させようと試みた。変化としての変化、たんなる傾向および流れとしての変化が、世界の絶対的な起源と計画を認識すると期待される知性に反対するのである。

* 『現実とは実践的な性格をもつか (Does Reality Possess Practical Character?)』一九〇六年『哲学に対するダーウィンの影響 (The Influence of Darwin on Philosophy)』一九一〇年『論理学研究 (Studies in Logical Theory)』一九〇九年。

ダーウィン主義あるいはあらゆる進化的な洞察によって状況は変化する。すでに自然科学を変化させたように、認識論も倫理学も社会学も変化させる思考方法が現われている。哲学は現象の発生の特殊な意義と条件を発見することができるように、絶対的な根源と目的を求

めることをすでに拒否しているのである。デューイは言う。たとえ生命は全体として究極的な目的に関して超越的な原理によって突き動かされていると千回証明されたとしても、真理と誤謬も、健康も疾病も、善も悪も、希望も恐怖も、現在あるようにそのまま同じ場所に存在し続けるであろう。しかし、もしわれわれが自らの文化を発展させ、自らのふるまいを改善し、自らの社会的な活動において進歩することができるためには、われわれは起源と成長の特殊な条件から出発せねばならない。

同じように心理学においては、存在から過程への方の変化とともに、「心理状態」(それは感覚や観念などで、ちょうど物理学が物質を原子から合成しているように、従来の心理学はそれらから心理的生活を合成してきたのであった)のパターンの構造的な統一性から行為の制御的な統一性への方の変化とともに、不変の形式から運動と成長への見方の変化とともに、価値の枠組全体が変化したのである。精神的な「能力」というものは進化の一定の傾向である。「意識状態」とは変化の徴候である。静的状態とは完全な適応の「様態」である。経験とは、意識状態の事柄であるよりも、むしろ行為と実践の事柄であり、能動的な適応と行動の事柄である。全ての器官は隣接する特殊な状況へ適用する道具なのである。身体全ての部分と同じように、ここにはわれわれの周囲を純粹に認識したり理論的に観照したりするためのものはないのであって、われわれの脳もまた腕や眼と同じようにわれわれの実践的な機構の一部分である。認識の器官としての脳はもともと

とは運動器官なのである。知性とは特殊な環境に適應する能力と裝備の一定の方法である。その目的は現実を「映すこと」ではなく、周囲からの刺激に対して、正しくて迅速で効果的で、そしてこう言うてよければ、有用で満足はいく反応へと導くことである。別の言葉で言えば、認識の目的は事物のうちに一定の変化を引き起こしたり、好ましい変化が得られるように、周囲の環境のうちに変化を作り出すことである。認識とは現実における変化であつて、それは全ての行為が事物のうちに変化をもたらすのと全く同じなのである。

このことは認識論にとって一定の意味をもつ。すなわち思考一般と現実一般との關係を尋ねるかわりに、認識の論理は思考というものをその条件的な性格において研究するべきであり、先行する特殊な機会と欲求されている後続の成果とに關係する特殊な手続きとして研究すべきなのである。あらゆる思考と認識は特殊な状況から生ずるが、この状況は全体として自らのうちに矛盾をはらんでいる。この条件によつてつねに不一致や欠除や衝突がある。注意以外のたんなる知覚だけではそれに気づかない。そして注意は現存する状況のうちに何らかの危機を認め、何か不安定で不確実で問題をはらんだものを認める。当初はつねに焦燥と不調和がある。所与の経験の或る種の連鎖は障害や欠落として心に思い描かれるのであつて、それらは不満足なもので自らの側からのその補完を必要としている。他の種類のものは、求められるもの、望ましいものとして示され、現在は存在していない望ましいものとして示されるのである。与えられたものと求められるもの、

現存するものと現存しないものとの間のこの衝突が思考を呼び起こす。知性的なものとはこの対立についての報告であり、それを説明して確定しようとする試みである。所与の不満足に対する粗野な反応はこの試みによつて妨げられ、活動は注意という媒介において手段と目的という規定のもとで検証されるのである。思考の目的はこの状況全体を理解することではなくて、問題の性質に関して有用であつてその問題に関して操作されうる繋がりを取り出すことである。思考は確かな危機を取り除くための方法としてつねに呼び起こされるのである。

認識とは道具であり、ストレスと闘争の産物である——これがデューイの主要な思想である。生活のうちで与えられるあらゆる状況は一樣な全体であつて、それは有機体と環境、内面的な精神と対象、努力と障害、行為者と行為をとともに包含している。この状況全体は一定の不満足性を含んでいて、有機体を維持するための目標となつている。それ故にわれわれはこの状況を部分に分けて、そのまま維持されるべき部分と、それに対する反応がある部分とに分ける。われわれは経験全体を「分類」（分節化）するが、それは、そこにおいて異質的で非連続的（非首尾一貫的）なものをわれわれが取り除くためであり、所与の経験の矛盾対立を干渉によつて再構成し、改良し、再形態化し、そのようにして相対的に変異に富んだ経験から相対的に整理された経験への移行をもたらすためである。あるいはデューイが述べているように、われわれの知性的な活動によつて「連続的な経験は首尾一貫した意味

の全体性へとまとまるのであるが、この意味の重要性が明示されたのは、それが内的な混沌を通過したことによってであって、この混乱のなかで矛盾対立という手段を通じて一定の内容がそのように客観的なかたちで意識された部分的なものとなったのである。」簡単に言えば、所与の「現実」は連続的でも安逸なものでもなく、思考によって何らかの特殊な対象ないしは何らかの特殊な問題に関する側面をめざしてそのようなものであり得るのであって、その際により広範な連続性とわれわれにとって有利な一定の性質を得るのである。何らかのものと先行する危機と最終的な調和とをもって、われわれの頭脳は完全に実践的なかたちで行為と繁栄を目ざしているのである。

しかしながら認識のこの生物学的な解釈はデュイイの思想の全体をなすものではない。一般の哲学においては、と彼は言う。実践的である全てのものは、欠除および欠乏として、矛盾対立および非首尾一貫性として、欲求および努力として、損害および報酬として、「たんに」個人的なものに関わる。そしてこの「たんに」はここではその全ての正当な権威のために宇宙的な統治の審判を引き合いに出す権原を持っているのである。しかしながらわれわれは次のように想像する。すなわち、アカデミックな哲学のこの伝統と文化的な残滓は一掃されて、哲学は今日の最も活動的な努力から新たに出発するであろう。個性と個人的な性格が政治や産業や宗教や科学のなかに深く現われてくる時代にあって哲学が人間的な考察と自由な関心のうちに入ってくるのは、哲学がこれからは、何か個人的なものが視界に入るや否や、「たん

なる」現象論について口まねをして叫ぶことで満足する用意がある場合だけだとすれば、哲学から何が生ずるのか。生活に悲劇性と悦びと瀬戸際の危機をもたらすものは、何故に物事の秩序から選り分けられるべきなのだろうか。物質と運動に関する判断だけが妥当なものであるか。それとも可能性と要求、創意と解答の言葉での宇宙の解釈もまたそうであろうか。認識論は局所的な自然の理論から出発すべきであろうか。それとも普通の生活と道徳と経験という基礎から出発すべきであろうか。たしかに現代生活の最も本来的な諸問題のひとつは宇宙についての科学的な観察と道徳的な生活の主張とを融合させることである。科学的な判断は道徳的な判断に同化されるべきであり、そしてそのことを証明するのはプラグマティックな事柄なのである。

諸問題は回帰して互いに似かよってくる。相対的に確立されたさまざまな種類の反応は唯一の包括的な行為体系に、一般化する成功した真理体系に序々に組織されてきて、それをその後でわれわれは「永続的」と呼んでいるのである。この真理体系はすでにつねに社会的に維持されて推進される社会的な協働の成果なのである。論理的な思考はそのような社会的な織物に織り込まれた個別的な行為であるが、その場所は最も頻繁に繰り返される必要と目的の方向指示なのである。そして彼にとっては哲学的な体系の場合も思考の場合と全く同じである。それらもまたつねに特殊な社会状況によって呼び出されてきたのであって、これらの状況への回答として有用だったのである。過去の全ての体系はそのような政治的・経済的ならびに科学的な諸条件の産

物であつて、これらの条件の変化はそれ自身とともに理論的な諸形態の変化をもたらしたのである。そしてこれらの理論的な諸形態は、それらがそこから現われた社会的な混乱から人を導く手助けをした限りにおいて、価値を持ったのである。――無批判的な経験の世界は社会的な諸目的と諸手段の世界であり、忠誠と協働という諸価値を包含する世界である。しかし経験の批判と認識論もまた、人類の社会的な実践が捉えるべきであるような問題なのである。ただこの問題の形式は抽象的であつて、遠い生活の形式のように見える。実際にはここでは理論と実践あるいは認識と行為との関係が問題になつてゐる。感情と思考、精神と物質、主観と客観の間の対立はたまたま偶然に作られたものではなく、もの見方と実践的な対立の特に提示された深刻な形態であつて、これらの対立は現代的な生活のあらゆる考察のうちに自らの起源をもつてゐる。そしてこれらの対立は、もし現代的な生活が滞りなく進行すべきだとすれば、解消されねばならないのである。まさにここから、行為の世界から、哲学は自らの問題を導るのである。認識の問題の二つの主要な解決である経験論と合理論に対して、一方には自由の要求と経験との個人的な関係と多様性と進歩が対応し、他方には共同の秩序への要求と有機的な統一と過去の保持が対応している。経験論は現代文明のゲルマン的な要素であつて、それは発意の根本的な力、欲求と衝動、大胆な悦びと満足、動機と創意の要素である。これらに対して合理論は古典的な世界から由来し、文明と組織と秩序の世界から由来し、そして支配と指導という保守主義的な力としての

権威の世界から由来している。現代世界の今日的な問題は再構成と改革であり、この問題のなかで個人は文明の担い手に成長することになる。しかしいかにして個人は権威的な真理を自立した生活の自由で健全で直接的な表現へと変革してゆくことができるのか。そして、もしも個人の活動が従属させられてゐるとすれば、いかにして文明は自らの純粋な価値を保つことができるのか。ここにも危機があり、そしてこの危機もまた全ての矛盾対立と同じように、すなわち行為のうちにあるものである。ただ活動のなかで、古く広範囲にわたる永続的なものは、変異的でユニークで新しいものと和解するのである。何故なら活動とは結局は社会的な活動であつて、それは支配という動機も創意という動機も同時に必要とするからである。そしてそれはまさに指導的ならびに個人的な関与としてであり、それと同じように、現在の利害対立を超えて高められた知性としてである。かくして真理論はひとつの問題であることを止めて、社会生活の有効な道具となつてゐるのである。

それでは知識については何が永遠の相の下に (*sub specie aeternitatis*) あるのだろうか。私はこの理想の美学的な魅力に捉えられる、とデューイは言う。そして誰がそうでないだろうか。緊張の解けた瞬間というものがある。それは、最終的に平安があり、われわれが孤独のうちに置かれて、われわれがそこで生活し、それとともにわれわれが存在し、それに対してわれわれが何かを行なう世界の永続的な要求から解放されたいという欲求が抗しがたく思われる瞬間である。それ

は活動的な世界における生活によって課せられる応答が耐えがたく思われる瞬間である。しかしそれにもかかわらず、今日現在のみのりゆたかな進歩へのつながりや拡がりや欠いて隔離された修道院的な無垢を保つのではなく、むしろ自らの時代の生き生きとした闘争と獲得に能動的に関わるなかで彷徨うことができるならば、それは哲学にとつてよりよいことなのである。

プラグマティズムについてまさに妥当することは、その問題と解決は、たんに事実についての関心から主張されるのではなく、生活と人間的な課題についての関心と注目から提起されるということである。すなわちそれは、たんに存在するものだけではなく、さらに加えて、よいものであるもの、その逆であるよりもむしろそのようにあるべきものについての関心である。そしてデューイの論理的な理論におけるプラグマティズムにとつてもそうなのである。全ての論理的な思考は一定の危機を解決し、一定の問題を解決するための方法として呼び起こされる、と彼は言っている。しかしわれわれの思考はしばしば問題の解決であるよりはむしろ問題の形成である。それはしばしばたんなる推論であり、知的な贅沢であり、気楽な機械的操作である。しばしばわれわれは考察全体に失敗して、結局は問題を解決するかわりに、たんに別の言葉に移されただけの問題それ自体を考察しているのである(デューイ)―それは明らかに哲学においてである。したがってデューイにとつてはたしかにわれわれの思考の「かくあるべき」が問

題なのであって、それこそが思考の最大の真理と価値であるように思われる。私は何よりも、私が緊密で特別な矛盾対立の関係のうちにあるものや、私が自分に対するその強烈な重要性を自ら感じているものを構想するように促されていると感ずるべきなのである。思考が真剣なものであるのは何よりもまず、損害あるいは利得という明確な対立が思考にとつて問題となつている場合である。啓蒙された理性の栄光と思考の半可通のしろうと芸が物事についての意見を決定するが、その物事の重みと価値はただ生と死が経験するのである。思考は社会的な実践のなかで明確なかたちで価値を肯定したり否定したりして、関係を調整し規定するが、この関係は、たんにこれを子細にみると、欠乏として、あるいは満足をもたらし、自らの価値ないしは無価値を明らかにするのである。かくしてどこにおいてもわれわれの思想は自らの対象における矛盾対立から生ずるのである。

デューイの認識論は心理学的な思考にもとづいており、したがって「心理学主義的」である。しかし今日の心理学主義は、全く首尾一貫してあらゆる思考を自然法則に沿った心的過程として論じてきたのであつて、人間の認識の真理についての確実性を揺るがす立場にある。何故ならあらゆる心理学的な過程は、それが真理に到ろうと誤謬に到ろうと、必然的なもので法則に沿ったものだからである。あらゆる心理学的な過程は、主体的な条件の配置の何らかの変化にもなつて別のものであり得るし、そうであらざるを得ないであろう。そしてそれにもかかわらず真理のうちにわれわれは何かよりよきもの、何か唯一

のかけがえのないもの、一定の思想内容を求めているのであって、それはそれ自身の真理性を喪失することなしに恣意的には変更され得ないであろう。そして、真理のこの唯一性に対してデューイは自らの矛盾対立の理論によって攻撃を仕かけているように思われる。われわれにとって真理ないしは誤謬が問題となる場合がわれわれに対してあるのは、われわれが自らの思考の対象に対して最も適切で最も好ましい関係をもつためなのである。この対象との自らの関係のなかでわれわれは自らの生き生きとした危機、明確で正確な矛盾対立を形づくることになるのであって、この矛盾対立のなかのみ出発点があるのである。対象がわれわれにとって遠くなればなるほど、われわれにはより多くの機会があり、それについてのわれわれの思考のためのより多くの選択肢があり、その結果としてより多くの相対性も残るのである。ただ矛盾対立からのみ明確で限定的で重要な決定が生ずるのであって、その決定はわれわれの回答の全体によって確保されるのである。このようにして獲得された真理からわれわれは回答されるのである。そのような真理はわれわれのためだけのものであり、堅固なもので、義務として課せられるものである。もしそれがすでに個人的なものだとすれば、それは少なくとも回答として個人的なものである。したがって真理とは、われわれがそこから自らの回答を確保するような思考内容であろうが、それは、経験された危機の唯一可能な解決としてこの思考内容を獲得したかぎりでのことである。

この主題^{テーマ}に答えることがデューイの哲学全体を導いている。そして

それは同時に道徳的な事柄であって、それをこの哲学は理性の全てのはたらきの上に持ち上げたのであった。もし全ての認識が道具だとすれば、それは全ての道具と同じように仮定的なものである。それは善のために用いられるように悪のために用いられるのであって、いかにして、そして何のためにこの道具を用いるかという適用の道徳的な責任の問題である。かくして哲学的な体系というものは、社会的ならびに文化的な生活の最も緊急な問題に対処するためにあるものである。そこでは哲学的な思考にとって新しい理想が主張されるが、それは無感動^{アフラシヤ}や純粋な観照や最も道徳的な生活とともにあるような明確な知識というような理想ではなくて―生活に対する最もよく練り上げられた関心と効果的な関与という理想である。これはプラグマティズム的な厳格主義^{リコリズム}であって、それはジェイムズにあつてはより内面的でもっと穏やかであるが、デューイにあつては堅固な厳しさを獲得している。よき人々とともに求めて迷うならば、誤ちを犯すことはないが道徳的な生活にとって価値をもたぬ場合よりも、哲学にとってはよりよいことである。―これは現代哲学においてこれまでに明確にされた最も極端な道徳主義であつて、同時にプラグマティズム全体の最も根本的な業績のうちのひとつである。

七 F・C・S・シラーの「人間主義」^{ヒューマニズム*}

もし何らかの主張が真理であることを要求するならば、とシラーは言っている。その要求に権威を与えるものはつねにその結果である。

この主張が評価されて価値あるものであるかぎりには、これらの結果が求められるもので、好ましいもので、よきものでなければならぬ。しかしあらゆる真理は、承認されたり、適用されたり、充当されたりする用法でなければならぬ。したがって真理を主張するということはその用法に依存している。真理の真理性は無限定なものではない。すなわちあらゆる格律はその用法から成り立っているのである。全ての意味は目的に依存している。全ての精神生活は努力に満ちたものである。プラグマティズムはあらゆる純粹な認識の努力に満ちた性格を否定すること全てに対する組織的な抗議である。そのような認識は実際には全体として関心や企画や願望や選択などによって浸透されているのである。そして、それによって意志の優位性が規定されているのだから、プラグマティズムとは目的論的な心理学を認識論のために意識的に使用するということであつて、そのような使用は結局は意志の形而上学を含んでいるのである。—このような規定の仕方のうちに特殊なシラー的特徴がさりげなく現われている。すなわちそれは経験よりも意志を強調することである。努力なしには、一定の関心や満足なしには、われわれは全く思考しないであらう、とシラーは言う。あらゆる主張は一定の問題に対する回答として理解されねばならない。しかしあらゆる問題に対して多くの回答がありうるのであつて、またあらゆる主張は多くの問題に対して回答しうるのである。したがってここには明らかに選択肢の間で一定の選択があり、そしてここには論理的な可能性の間で選択する一定の能力がなければならない。この能

力として人間は存在しているのであつて、人間は、彼の目的に合致したものにや、彼の意図に反したり彼の関心を掻き立てるものを選び出すのである。したがつてあらゆる真理は人間的な条件で条件づけられていて、実践的であつて、それらに対して他のものよりも優先権が与えられているのである。何かを真理として宣言したひとは、それによって選択を遂行したのであつて、可能性を排除するか実現するかしたのである。彼は彼にとつて個人的により価値がありよりよいと思われるものに優先権を与えたのである。したがつて人間はあらゆる主張の創造者であり、また真理論において人間を考慮しないことは不可能なのである。だから、個性の論理的な權威を認めることがきわめて必要なのである。人間は万物の尺度である。プロタゴラスのこの言葉はシラーの「人間主義」全体の宣伝文句をなしている。

* F. C. S. シラー (F. C. S. Schiller) (オックスフォード) 「スフィンクスの謎—公準としての公理 (The Riddles of Sphinx—Axioms as Postulates)」ヘンリー・スチュート (Henry Sturt) 編『個人的觀念論 (Personal Idealism)』に所収。—『人間主義 (Humanism)』(一九〇三年) —『人間主義研究 (Studies in Humanism)』(一九〇六年) —『人間主義を擁護して (In Defence of Humanism)』『マインド (Mind)』新シリーズ第二三号「関連性 (Relevance)」『マインド (Mind)』新シリーズ第二二号「合理的な真理概念、第三回哲学大会に関する報告 (Der rationalistische Wahrheitsbegriff. Bericht über den III. Kongress für Philosophie)」一九〇九年、その他。

われわれの問題はわれわれが知ろうとするものにもとづいており、われわれの回答はわれわれの問題に依拠している。こうして全ての真

理も虚偽もわれわれの目標に関連している。主張が自らの生活に課せられた目標を満足させるか支援するならば、それは真理であり、逆の場合は虚偽である。こうして何らかの目的を支援するものはよきものとしてあり、それに抵抗するものは悪しきものとしてある。したがって真理と虚偽はよき知的形式と悪しき知的形式なのである。客観的なすなわち現実認められた真理は主観的に認められた真理からたんに選択されたものに過ぎない。真理とは本来的にたんに個人的なものである。しかし社会的な関係行為の増大と生活における繋がりの必要とともに、真理は体系的で「客観的」な性質を獲得して、「広範囲に拡がった織物」に変わるのである。真理とは大部分は社会的な秩序である。それは共通の善のために有用であるもの選択なのである。

それにしても「先天的」な真理というものがあ、シラーはそれらを「超人的な英雄たち」と呼び、またそれらは全ての人的な経験に先行していると言われている。しかしそれらもまた人間の創造したものである。すなわち、「形成的努力」(nisus formativus)が精神的発達に先行しているような、かたちで、要請が経験に先行しているのである。それらは最初はたんなる要請として、主観的必要として生み出されて指定されたが、自らを立証し、「機能し」、きわめて浸透的で信頼できるかたちで実践的な成功を収めたために、われわれはそれらを見ますます多くの確実性をもって「公理」として、「先天的な原理」と見なすようになるのである。このようなわけで世界のほとんどこの場所においても、「陸においても海においても」今日まで正確な正体は発

見されなかったのである。われわれは経験を単純化するためにそれを必要とするかぎりでそれを要請し、そしてそれが永続的に有益であるかぎり、われわれはそれを「先天的」なものとして保つのである。そして全くそのようにしてわれわれは因果性や自然法則や幾何学的な空間やニュートンの時間^{アッリオリ}を要請するのである。全ての論理学はわれわれの要請のうゑに作られている。あらゆる真理は人的なものなのである。

真理は人間の生活に完全に依存して、人間の努力なしに生まれることはできない。そしてこの人間の努力もまた関心や希望や理解に左右されるのである。同じように現実も「独立的」なものではない。すなわち現実^{アッリオリ}はわれわれの認識に依存しており、われわれと相関的なものである。真理と現実^{アッリオリ}はわれわれにとって同時に成長するものである。真理を構成するのと同じ過程が現実をも構成するのである。最初にわれわれに与えられている「本源的な現実」(primary reality)、感覚や具像性や幻覚や夢のそれは、宇宙の或る種の原材料であり、混沌とした質料である。この質料からわれわれは「事実」をつくるのであって、その際に価値あるものやわれわれの生活に「関わりのある」ものを取り出して評価するのである。われわれが実践的な生活のうちに発見する「事実」とはすでにわれわれの選択という人為的な創造なのである。われわれの興味を惹くこともなく、われわれが利用することのできない事実というものは、われわれにとっては「非現実的」なものである。われわれの興味と企画なしにはわれわれの世界は混沌のまま

であろう。現実とはわれわれの真理と同じ程度に同一の歩調をとって展開するものである。われわれが真であると見なすものを、われわれはまた現実的であると見なすのである。したがってわれわれは自らの主観的な本性の全面的な関与をもって真理を形づくるが、それと同じようにわれわれはわれわれに与えられた材料から調和のとれた満足のある宇宙^{コスモス}へと現実を加工するのである。認識のあらゆる変化は現実の変化にともなうものである。新しい真理を認識する一方で、その真理が前から生き生きとして妥当していたとか、それがわれわれの認識以前にすでに実在していたとか、われわれが仮定するのは、たんに奇妙な幻想である。別の言い方をすれば、あらゆる認識の際にわれわれは新しい真理を、すでに存在していたものが受け継がれたかのように骨董化しているのである。「われわれが自らの好みにしたがつて世界と関わった時にいつも、現実にはただわれわれのおかげで無限の困難の報酬として生じたものがつねにそのようなものであったとわれわれが語るということは、馬鹿げたことである。」たしかに世界はわれわれよりも前に実在していた。しかしそれはわれわれの行為や知識や熱望が世界に刻印した形式においてはではないのであって、それらは世界を変化させているのである。世界はわれわれよりも前に真理の体系という形式で存在していたのだが、その形式をわれわれはまさに自らの新しい認識によって変様させたのである。

われわれにとつて現実に現われるような世界は関心の反映であつて、この関心からわれわれの生活が与えられる。そしてこの世界は、

われわれとわれわれの先祖がそこから作り出そうとしたものを導入するのである。所与の事実は完成されたものではなく、長い発展と厳しい闘争の産物であつて、決してまだまったく終局に達してはいない。客観的な世界とは、この世界が展開していくものであり、この世界が将来に発展していくものである。世界がわれわれに抵抗してわれわれの邪魔をするという意味で、これから先客観的であろうということを誰が保証できるだろうか。世界がわれわれの邪魔をするということはたんに部分的な真理にすぎない。しかし増大する真理によれば、われわれが世界の邪魔をするのであり、われわれは世界を受け入れ可能な姿へと駆り立てるのである。世界は「物質」である。あるいはそれは、アリストテレスの言えは質料^{ヒュレ}である。すなわちそれは宇宙^{コスモス}の材料であつて、そこから世界の満足のいく形態がもたらされるべきものである。世界は可塑的であつて、われわれの欲望によつて形成されうるものである。このことは、世界のこの可塑性がまったく無限であるかのごとくにわれわれが行為ができるために方法論的に必然的なことである。何故ならもしわれわれがその可塑性に限界を帰属させることができるならば、そのことによつてわれわれはそれらの限界を乗り越えようとする試みを排除することになるだろうからである。われわれは次のように仮定せねばならない。すなわち、もしわれわれが世界に対して充分巧みに首尾一貫したかたちで挑戦しさえすれば、われわれはわれわれが欲する全てのものを世界から作り出すことができるのである。

かくしてわれわれの理想と目的とわれわれ自身は世界の生成の現実的な力であり、現実的な相関者である。たしかにわれわれは世界を無から創造しはしないし、われわれの力は無制限なものではない。しかしわれわれはただ世界を利用し始めるのであり、そしてどのくらいの範囲で現実の創造のために働くことができるのかについてわれわれはまだ知らないのである。当面われわれはただ次のことくらいを主張する。すなわち人間の行為実績はつねに自然の秩序の確認可能な要素であり、人間の力と自然との間の乖離は通約不可能ではないのである。人間の関心事である偉大な問いのうちのいかなるものもわれわれに対して永遠に取り消し不能なたちで決定されてはいない。全てにおいて世界は、いま在るよりもっとよく形づくられうるのであり、無限に改良されうるのである。かくしてわれわれは世界に向かって協力するのであり、われわれは世界の事柄に対する共同回答者なのである。そしてそのためにこれまで絶対的な現実というものは存在しないのである。絶対的に現実的なものとは、われわれの全ての運命を実現するものであるうし、それにもとづいてわれわれがそのまま変わることなく維持しようとするものであるう。最終的な決定的な現実というものはわれわれの前方にあるのである。

※

これがシラーの哲学であって、その結論は次のような事実であるように思われる。すなわち世界とはわれわれにとっては、それについてわれわれが知っているものであり、世界とは全体としてはわれわれが

作る全てのものである。もしわれわれが世界についてより多くを知るならば、世界はわれわれにとってより大きなものである。われわれの知識の変化はわれわれの経験的な圏域の変化にもなうものである。発明と知識とともにわれわれの世界のうちに新しい力が入ってくる。それによってわれわれの宇宙のなかの何かが現実に変化するのであり、自然全体がわれわれの欲求に対して異なったかたちで反応するのである。したがって、世界は真理と発見によって拡大され、豊富化され、変化させられるように思われ、そして世界はわれわれとわれわれの祖先がそこからもたらそうとしたものを導き入れるように思われるのである。

ここで人間主義ヒューマンイズムは純粋な観念論を衝撃的なかたちで改竄している。すなわちそれは、絶対的な観念論という意味において、したがって精神が現実全体を自らの思考によって創造していると認めていると言うにはあまりに懐疑論的である。またそれは、主観的な観念論とともに、かくして導入された現実の世界はわれわれの観念と思想の内容以外の何ものでもない主張するには、あまりにも実践的に基礎づけられているのである。―それは曖昧で矛盾したままである。世界それ自体はそうではないが、少なくともその持続的な構成と配置は人間の精神の所産なのである。―しかしもしも世界の今日の形態がわれわれの所産であり、そしてもしも世界のうちには現実に欠除ストリクと圧力と苦痛と疾患と失敗が存在し続けているとすれば、次のように問うことが残る。すなわち、それもまたわれわれがもたらしたものなのだろうか。それと

も、その全てはすでに無定形の質料ヒュレのうちに、「本源的な現実」(primary reality)のうちに置かれていたのであって、われわれは構成の際にそれを受け入れたのであろうか。もしも質料ヒュレのうちに欠落があったとするならば、多くの人々は次のように言いたくなるであろう。すなわち、そうなる^{ヒュレ}と質料ヒュレのうちにはきわめて多くのものがあるいは殆んど全てのもが存在したのであって、われわれの世界の堅固なシステム全体と連続的な部分が存在したのである。さらにもしも世界がわれわれの所産であり、そしてわれわれはつねに最も価値ある選択肢と最も有利な事物を選択しながら世界を確立してきたのだとすれば、われわれの世界は「今日までに可能であった全てのものなかで最善のもの」である。しかししそうなると世界は何らかの神論のようなものを必要とし、部分が各々相対的に目立つという証明を必要とするであろう。次のようなことを発見する人々がつねに存在するであろう。すなわちそれによれば人間はその歴史全体をもって世界を改良するよりも、むしろ破壊したのであって、「進歩」という言葉は仕事や科学においてはおそらく適切であるが、しかし人間の精神や人間生活においてはそうではないのである。もし世界が決定的にわれわれの所産であるならば、それによってあらゆる人間生活におけるわれわれの無力はより深刻なのであって、それをわれわれは全く改良したり統一したりできないのである。したがって、「現実の構成」よりも、また結局のところ何もそれをわれわれに対して否定しなかった「完全に可塑的な」世界の加工や形成よりも、はるかに重大ではるかに希望に満ちて同時にはるかに

英雄的な何かが現実に行なわれているように思われるのである。

かくして人間主義ヒュレニズムが形而上学として存在することは一般的な利益をもたらしはしない。しかしながら、もしそれが現実ヒュレニズムに人間主義ヒュレニズムであるか、あるいはハイデルベルク大会で提出されたような「人間主義」(humanism)であるならば、その問いは最終的な「現実」や「世界」のうちにそれに対する答えがあるようなものではない。その問いは人間と認識との関係に関するものであって、思想と現実との関係に関するものではない。こう言つてよければ、われわれは自らの主張によつて何か客観的なものを思考しているという事実を最初から考慮しないのであり、認識固有の諸問題を最初から考慮しないのである。いかなる主張も人間にどこからか出来上がったかたちでやって来たのではなく、人間の実践によつて全ての人のところにやって来たのである。われわれの全ての真理はそのような実践のうちに自らの連続的な歴史を持つている。この歴史全体のうちに人間はつねに存在しているのであつて、この人間が真理を作り、真理を受け入れて利用し、目的に向けて真理を変更したり放棄したりするのである。したがって、他の問題から意識的に退却することで、全ての真理を人間の実践と企画、個人的な発明と社会的な協働によつて定義することが可能なのである。かくしてわれわれは全ての真理を次のように据えねばならない。すなわち、真理が反証されなかったとすれば、それはそこで一定の知的な創造が遂行され、何かひとを満足させることが遂行され、目的の一定の実現と導入が遂行された場合だけなのである。これが人間主義ヒュレニズム的な

真理概念の全体である。

したがって人間主義は認識に対する一定の偏向した立場であって、認識本来の問題を捨象している。それは、人間を超越したものに關わる全てのものを捨象して、世界のなかで人間的であるものにもつばら注目することによる世界に対する立場である。認識に対するその問いは、誰が認識するかということである。その関心は認識する際の人間に關わっている。あらゆる認識のうちには認識する主体の直接的に^{チユアル}現在の現実がある。そしてまさに個人的な活動のこの具体的で生き生きとした事実、あらゆる認識的な活動のこの内的で不動の価値が人間主義的な関心の主題である。「愛と希望、欲求と意志、信念と実践の対象」であるものうちにはなく、「むしろまさに選好と期待、願望と意図、信念と作業のうちにわれわれが見出すべき現実こそ、そこにおいて、そしてそのために、^{ニズム}事実としての世界^{ニズム}も^{ニズム}觀念としての世界^{ニズム}もそれ自身の存在をもつものなのである。」（W・A・ムーア）まさにこの現実を区別する必要がある。すなわち木星の衛星や回虫の解剖は現実である。しかし人間の個人的で内面的な生活もまた現実なのである。―そしてこれら二つの種類の現実^{ニズム}は同一の秩序ではない。人間主義はプロタゴラスの言葉とならんで「われ人間を探求す」というディオゲネスの言葉と完全に一致するであろう。したがっていわゆる皮肉なしに人間主義は、もし必要ならば、回虫の解剖のなかにも、人間を求め、あらゆる思想、あらゆる認識機能のうちに人間を求めるのであって、それらのうちに具体的で個人的な表現を発見することができるか

ぎりそうなのである。

認識の批判とならんで真理の価値というものを認識と外的な世界と一致のうえに形づくるのが可能でないならば、この価値をもつばら真理の内部に見るという可能性が残ることになる。真理のこの内部とはわれわれ自身の内部である。おそらくそのためにバーデンの新たな超個人的な規範ないしは法則を思い起こして、この觀念的な規範のうえに真理と自らとの一致を形づくるように求めるのである。そしてそのために、全く別のかたちで人間主義は、われわれがあらゆる認識のうち^{ニズム}にそれを創造した人間を認め、すなわち人間の関心と願望、人間の個性と性格を認めるよう誘うのである。人間主義によれば、われわれがあらゆる真理のうちに発見すべきものは価値あるものであり、すなわちそれは個人的な意図と生活からの真理の誕生である。したがって個性の論理的な可能性を認めるということがあるのは、われわれがこの権威を個性的な創造のうちに、個性の真理のうちに見出すことができるからなのである。そして人間が事物の尺度であるのは、われわれが事物のうちに人間の尺度とともに人間を見出すことができるからなのである。この意味で人間主義は現実には、オックスフォードのシラーの標語がより適確に述べているように、「個人的觀念論」なのである。そして、述べられている文章によってこの人間主義を敢えて解釈することが私に許されるとすれば、次のように言うことができるであろうし、またそのこと^{ニズム}のうちに私は人間主義の長所を見る。―す

なわち、批判主義から道徳的な観念論へはほんの一步なのである。世界とは実際には人間の思考の領域である、と批判的な人間主義は始める。―そしてすでにそこでこの批判的な人間主義ヒューマニズムはこの思想を回転させるのであって、すなわちそうなる世界の内容と意味は人間なのである。

八 W・ジェイムズの宗教的ならびに道徳的哲学*

W・ジェイムズにとつては哲学は完全に専門的なものではなかった。つねに彼は哲学のうちに若干の曖昧な意識が含まれているのを発見してきた。この曖昧な意識をわれわれは生活の意味に關して持っているのである。また彼は哲学のうちに、世界の圧力を感じてそれを表象したり、世界についての自分の見方を持つたりする個人的な流儀を見出してきた。彼にとつては哲学とは氣質の問題であり、最も内密なものを持つ事柄において人間の性格を表現するものである。世界のあらゆる定義は、一定の個性が世界に直面して自発的に受け入れる反応なのである。もしわれわれが自分たちの哲学的な意見を形づくるならば、あらゆる人間がわれわれのうちで活動しているのである。こうして哲学のうちで二つの氣質が競い合うことになった。すなわち経験主義的な氣質は事実をその多様性において注目する傾向を示し、合理主義的な氣質は永遠不変の抽象的な原理を見上げるのである。後者は「柔和な」(tender-minded)、知性的タイプであつて、観念論と楽観主義に傾き、宗教的で、独断論的であつて、自由意志と一元論的な世界を信ず

るものである。前者は「粗野」なタイプであり、悲観主義的ならびに反宗教的に同調する感覚論者と唯物論者のタイプであり、宿命論者と多元論者と懐疑論者のタイプである。哲学の現在の分岐のなかでわれわれはこのタイプのなかにもかのタイプのなかにもよきものを見出す。われわれは事実に対しても宗教に対しても嗜好を持っているのであつて、この両者を綜合する体系を必要としている。もしもわれわれがそのうちに何よりもまず事実に対する科学的な誠実さを見出すことを欲するが、しかしそれとともに人間的な価値と宗教的ならびに英雄的な自発性への信頼という伴見出すことを欲するとすれば、そうなのである。そしてこの二つを綜合することがプラグマティズムの意図なのである。

*ウィリアム・ジェイムズ(William James)『信ずる意志(The Will to Believe)』(一八九七年)―『宗教的経験の諸相(The Varieties of Religious Experience)』(一九〇二年)―『プラグマティズム(Pragmatism)』(一九〇七年)―『多元的宇宙(A Pluralistic Universe)』(一九〇九年)―『真理の意味(The Meaning of Truth)』(一九〇九年)―『根本的経験主義論(Essays in Radical Empiricism)』(一九一二年)―『人間主義と真理(Humanism and Truth)』『マインド(Mind)』新シリーズ第一三三号。―W・ジェイムズは一九一〇年に死去した。

W・ジェイムズの哲学はまさに全く個人的な性格のものである。彼にとつては「繊細な」タイプと「粗野な」タイプとの分岐は存在しなかつたように思われる。すなわち事実に対する経験的な情熱は彼の個性のなかでは宗教的な精神と緊密に綜合されていて、彼にとつては事実の領域と信仰の領域の間に分裂はなかつたのである。―根本的経験論

者」にとつてと同じように彼にとつては世界のうちには「現実的な可能性と現実的な不確実性、現実的な始まりと終わり、現実的な危機と破局、厄災の回避のための場所があり、現実的な豊かさ」と現実的な道徳的生活のための場所があった。彼のうちには学者と信仰する人間との間の論争は存在しなかった。最初は完全に時としては科学者として、医者および生理学者として、そして後には心理学者として、道徳的で具体的な生活につねに興味を持っていた彼は、自己の中心部においていつも個人的で内面的であつたので、彼は不一致や例外なしに自らの正確な経験と自らの道徳的な信念との間を進み、自らの科学的な興味と神秘主義との間を進んだのであつて、それらを彼は混ぜ合わせることはなく、むしろそれらは彼のうちで積み重なつてその豊かな「哲学的氣質」の統一を形づくつたのである。

W・ジェイムズは経験論のアングロサクソンの伝統を頂点にもたらしした。すなわち現実とは彼にとつては絶対的に経験によつて確認されるのであつて、経験の世界以外に世界は存在しない。「経験されるものの全てが現実的であり、現実的なものは全て経験されるのである。」世界全体は一樣な素材から作られていて、「純粋な現実」という素材から作られている。事物も思想も、意識も外界も、自我も非我也、この素材から作られている。「純粋な経験」は主観的であると同時に客観的であり、中立的で、多義的であり、単純な「所与」ないしは「現前」(Vorfindung)であり、全ての実在物の無差別的な質量である。われわれはただ付加的なかたちで経験のうちに「主体」と「客体」や精神

的世界と物質的世界や意識と事物との区別と種類分けを導入するのである。同一の経験、例えばわれわれが現在そこにいる家についての経験は、まずは私の生活の移り行く事実として、私の意識の状態として分類され、次にはこの家の客観的な歴史の一部分として分類されることができる。そしてそれでもそれは一つの同じ経験なのである。経験の所与の純粋な部分はひとつの関係においては意識という認識する役割を演じ、別の客観的な領域においては認識された事物の役割を演じている。ひとつのグループにおいては観念は物理的な現象(家)としてふるまい、別の領域においては意識の事実(知覚、観念、記憶)としてふるまうている。そして、それでもこの両方の場合において絶対的に同一の経験が存在しているのである。例えば、生まれたばかりの幼児にとつて最初の現実とはこの種の純粋な経験であり、それは絶対的に混じり気がなく、融合的で、完全に連続的であつて、その波動が現実的な中断なしに継続する連続的な流れに比較されるほうがよいものである。それは分節化されない現実であつて、表現されるものではなく、たんに生きられるものである。この連続的な経験のうちにはわれわれはただ後になつて意識と事物との区別のような自らの論理的な分離を持ち込むのであり、また全てのさらなる概念的なカテゴリーを持ち込むのである。そしてこれらのカテゴリーによつてわれわれは区別立てを行ない、そして言葉によつてこの本源的で連続的な「多における統一」を捉えるのである。

生きられる全てのものは現実的である。すなわちわれわれが抽象的

なカテゴリー（例えば同一性、因果性）や接続詞や前置詞などによって表現する感覚的な所与の間の論理的な関係もまた事実として生きられるのであって、したがって残りの事実と同じように「現実的」なのである。われわれの前置詞や接続詞やわれわれの「の故に」や「の時に」や「の上」や「のところで」や「とともに」や「そして」には経験のなかで一定の具体的で移り行く感覚や気分や態度や期待が対応しており、簡単に言えば、一定の生活、一定の積極的で生き生きとした現実が対応しているのである。それをわれわれは生きて、いるが、しかしわれわれはそれを知的に捉える術を持たない。何故なら、キルケゴールによれば、「われわれは前方に向かって生き、過去に向かって理解する」のであって、ただ不動のものだけを理解するからである。

要するに「経験は自足的であって、何ものにも接触していない。」それはさわめて連続的であるために、そのなかには先天的なもののため場所はなく、超経験的な原理や「連結的な補助」のための場所はない。結局のところ「真理」という概念もまた経験へともたらされる。「真理」とはわれわれの思想ないしは経験とその対象との一致であるということを経験は認める。しかしこの対象はふたたび経験されておき、それ自身経験である。したがって「真理」とは経験の別々の部分の間の関係であり―つねに具体的に経験される関係であり、疑いなく成功した、実践的ないし知性的に満足に行く関係である。経験は全てにおいてそれ自身として自足している。何かをその上やその下

に置く必要はなく、そして経験的でないものは哲学的な討論には属していない。

経験のうちでわれわれに与えられている世界は無限に多様である。一見して多元的な世界が多様性として現われており、自らのあらゆる思考作用によってそこにはますます多くの統一をわれわれがもたらしたとしても、そこから非論理的なものや否定的なものを完全に排除することは不可能である。「世界のうちにはあなたの立場と食い違うものをつねに存在するのであって、あなた自身もつと偉大な哲学者であるとしても、そうなのである。」そのようなわけでジェイムズは決定論的・一元論に改めて反対する。そこにおいて全てのものが永遠に決定され、因果的に規定されはじめ必然的であるような「宇宙建築」という威風堂々たる概念は彼のうちに確かな恐怖を呼び起こすのである。何故なら、われわれが実際に見出す厄災は、そのような世界にあつては必然的に永劫の過去から永劫の未来までそこにあつて、因果的に規定され宇宙全体によって保証されて、そこから消滅することはあり得ないだろうからである。しかし現実が「配分的な側面において」多様性として実在していて、この多様性は全体として固定されているわけではなく、諸部分において一定の独立性を保っているということは、あり得ることである。ただ無限に発展するだけで、完全な統一を達成して静止することの決していない宇宙として現実を理解することは可能である。現実のいかなるものも絶対的に単純ではない。あらゆる側面はそれ自身として自存しているが、それにもかかわらず他の全てのもの

と一定の可能な関係を形づくっている。全ての物体は自分の隣の物体と統一を形づくることができるが、しかしそれは、一般的な統一が最終的にもたらされうるようなものとしてではないのである。宇宙をフェヒナーのように理解することは可能である。すなわちそれは全ての部分において生きている世界であつて、その部分の個々の意識はより高次の意識によつてまとめられて構成されているのである。地球上の全ての事物は（フェヒナーによれば）魂を持っており、そしてこの魂はより高次の意識ある全体に貢献し、そしてこの意識が最終的に地球の魂を形づくっているのである。地球の魂はわれわれの守護天使であり、同じように惑星と太陽の魂も天使であつて、これら全てはまゝつて宇宙の魂、神の魂を形づくっている。われわれは地球の器官のようなものである。われわれの全ての感情と思考は地球の意識を豊かにする。もしもわれわれのうちの誰かが死ぬとすれば、それは「一つの眼が閉じるようなもの」である。しかしその者の思考は地球の魂のなかで継続し、そこにおいて新しい関係と繋がりの中に入つていき、そこで成長して発展していくのである。われわれ自身の知覚はわれわれの後で地球のより広大な生活のうちに生き残るのである。

W・ジェイムズはフェヒナーの世界観に大きな共感を示している。超人間的な意識という巨大なプールが存在していて、そこにおいては地球の住民の記憶が並べられて保存されているということは、あり得ることである。このプールが開くならば、一定の途方もない知識がこのプールを通じて個々の魂にまで達する。これが宗教的な経験であつ

て、それは、彼がただ名前だけを挙げてるように、二重人格や霊媒現象のような「病理学的な症例」のうちに示されているのである。われわれのうちには自然主義の与かり知らぬ源泉、幸運と力の源泉があり、それは最も絶望的な瞬間に栓が開かれるのである。この宗教的な経験が明らかにしているのは、自然的な経験は人間にとつて可能な経験のたんに一部分にすぎないということであり、われわれの生活の最も内奥の「識閥下の」の部分はわれわれの外の宇宙のなかで働いている同一の性質をもつた無限に広大な生命のうちに吸収されるということである。すなわちこのより広大な自我からわれわれのところまで自由な経験が到達しているのである。「自分としては、人間の経験が世界のうちに存在する経験の最も高次の形態であろうということを決して信じない」と彼は言う。「むしろ私が信じているのは、宇宙に対してわれわれは、われわれの犬や猫が人間の生活に対して現われるのと同じように現われているということである。犬や猫はわれわれのサロンや図書館のなかで生活している。それらが関わりをもつ場面の卓越性についてはそれらは概念を持たない。それらはわれわれの歴史のたんなる落ちこぼれである。同じように人間は他のより広大な生命の下ではたんなる落ちこぼれにすぎない。しかしもしも犬と猫によつて受け入れられた多くの観念がわれわれの観念と合致するならば、—そのような合致について犬や猫たちは自分たちの日々の生活のなかで証明を持ってるのであるが—それと同じようにおそらくわれわれも提供された宗教的な経験にしたがつて次のように信ずることを許されるので

ある。すなわちより広大な力が存在しているのであって、それは世界の向上に向かって働く際にわれわれの観念的な道筋と類似した道筋を辿るのである。」神は現実^に実在している。何故なら神への信仰は現実^に満足に行くかたちで機能しているからである。すなわちそれは結局のところ力においても知識においても決定的な神であって、おそらく同類のなかでただ第一のものであり、世界の出来事に超自然的なかたちで介入するものである。ジェイムズは全体として「途方もない超自然主義」に明らかに近づいて現われる。

最終的にジェイムズは次のような問題に到る。すなわち人間は信する権利を持つているのか。人間は、彼の純粹に論理的な知性は信仰への傾向を全く感じない場合であつても、宗教的な問題において信仰の立場に立つてよいのか。この問題はわれわれの意志に懸つており、信仰へのわれわれの意志に懸つている、とジェイムズは答える。われわれは自分自身の危険を冒して信仰に身を捧げねばならず、同じように自分自身の責任^{リスク}を引き受けて信仰を拒否せねばならない。宗教的な信仰は自明性を持たない。客観的な自明性と確実性はたしかに麗わしい観念である。しかしわれわれの惑星の上でどこにそれらを見出すことができるのか。もしわれわれが信仰の自明的な証明を待つているとすれば、われわれは、信仰する場合と同じように、自らの危険を冒してそうしているのである。もしもわれわれが信仰も不信仰も決定しないならば、そのこともまた決定であつて、そのこともまた、間違つた信仰や不信仰と同じように、真理を失なう危険と結びつけられているの

である。これら全ての場合においてわれわれは行為して自らの生活を携えて行くのである。ここにおいて決定的な選択が必要となる。われわれは誤謬と闘かうのと同じように真理を求める。科学においてはむしろ誤謬を前にした恐れがつねに決定を下すが、行為するという差し迫つた要求がある道徳的な生活においては、何の理由もないよりも行為への間違つた理由のほうがよりよいものである。何らかの事実を信することはその事実の発端近くで協力する態勢にあるし、多くの真理はそれだけで自らの具体化をもたらずし、不確実な成功への信念はそれだけで成功が生ずるように取りはからうものである。ここではわれわれは証明を待つことはできない。何故なら価値ある身分財産の喪失が問題となつているからである。もしわれわれが信心深いならば、宇宙はわれわれに対してたんなる「何か」ではなく、「汝」であり、それとのわれわれの関係は人格と人格との関係なのである。宗教はわれわれの活動的な善意志に訴えかけており、もしわれわれが宗教に向かつて道半ば来ているのではないならば、われわれのところ^に宗教からそれ以上の証明はもたらされないとわれわれは考えるべきである。それがどこから来るかわれわれは知らないが、もしもわれわれが神性を信するならば、われわれは宇宙に対して偉大な貢献を証示するという感情がわれわれに否応なくやつてくるのであつて、この感情が宗教的な仮説の最も深い本質に属しているように思われる。

すでにジェイムズの多元主義のうちには世界についての最も改良的な仮説としての非決定論が現われていた。おそらく現実性よりもはる

かに多くの可能性が存在するのであつて、現実性は可能性の海のうちに生まれるということがあります。宇宙の諸部分は一特定の運動の自由を持つており、実現されるかも知れない多くの可能性の間でつねに決定することができるのである。選択が行なわれた後では、どのような選択肢が選択されたにしても、実際の選択が必然的で合理的に見える。もしも世界のうちに現実に可能性があるならば、世界は救済されうる。これがジェイムズの世界改善論の基礎である。世界は害悪から救済されうる。たとえ自らの狭小な断片においてであるにしても、われわれは自分自身の活動によつて、世界の救済のために働くことができる。しかしわれわれの願望は結局のところその他の条件のかのたんなる一条件である。「創造の前に世界の創造者があなたに次のような物語を語つたと仮定してみよう。『さて私は世界を作ろうと思ふ』と彼はあなたに言つたとする。『その世界の救済は保証されておらず、その世界の完成は全く不確定であるか、あるいはそれは、その世界における行為者の全てがわれわれが位置している水準を可能なかぎり改善するという条件で生ずるのである。私は私が創造しようと思つてゐる世界の一部分を作る可能性をあなたに提供する。世界の救済は、あなたの見るように、決して保証されてはいない。現実的な冒険は現実的な危険をともなつていて、善を投げ捨ててしまいかねない。肝心なことは協同作業を社会的に遂行することである。そうなるとなあなたは自分だけで進んで行くだろうか。この危険に身をさらすことができるほどあなたは自分と他の行為者たちを十分に信頼できるだろうか

か。』——明らかにわれわれは『為されたことを信ぜよ』という申し出を速やかに受け入れるであろう。——われわれは全て意気消沈する瞬間を持つてゐる。自分自身に嫌気がさして、自らの空しい努力に倦き倦きするということは、われわれ全てに起こることである。人生はわれわれを見捨て、われわれは自らの怠慢のなかで放蕩息子例を探し求める。その時にわれわれが受け入れる世界は、そこにおいてわれわれが全てを捨てて父のような者の腕のなかへ駆け込んで行けるような世界であり、水滴が川に溶け込むように、絶対的生命のうちに跳び込むことのできるような世界なのである。——このような気質の人々によつて宗教的な一元論は、次のような悦ばしき言葉とともに導き入れられるのである。それによれば、『必然的に生起せぬようなものは何もなく、事物の本質の一部分でないようなものは何も無い。あなた自身がその一部分であり、自らの挫折した魂と自らの無力な心をもつてさえもそのうなのである。あらゆる被造物は神との統一を作り出している。そして神のうちには全ての善がある：たとえあなたにとつてはこの見かけの世界における幸福ないしは不運が結論されるとしても。』——しかしながら私自身としては、世界は冒険であつて、危険な場所であると思つてゐる。そこには現実的な喪失があり、失敗する人々がいるということとを私は認める。しかし、それを超えて多くの人々は、この道徳的な世界、この叙事的な世界のそこかしこで生じている成功に満足してゐるのである！——そのような世界においては生活は苦しみのもとにあるが、それは、倫理的な観点からすれば、その世界はわれわれがそ

こから作り出すものだからである。そしてわれわれは、もしそれがわれわれに依存しているならば、この世界を成功裡に形成していく用意があるのである。おそらく神自身は自らの生命力と高度な生命をわれわれのこの信仰から引き出しているのである。もしこの現実の生活が闘争であつて、そこでは生活はつねに何かを成功裡に獲得するといふのでないならば、生活は拙劣なふるまい以上のものに依存してはいない。しかしわれわれは生活を現実的な闘争として受け取るのであつて、宇宙のうちに現実には何か悪しきものがあつて、そこからわれわれは理想と自らのあらゆる信仰への自らのあらゆる感覚をもつて生活を回復すべきであるかのように生活を受け取るのである。—ジェイムズの道徳主義の核心は、自分のものによつて世界のうちに可能な最善のものをもたらしということである。「道徳的な生活の最高の形成とは現実の諸関係にとつてきわめて狭い規則をつねに超越するという形式である。すなわち唯一の無条件的な命令とは次のようなものである。すなわちわれわれは認識と臨機応変をもつて倦むことなく、われわれにとつて可能だと思われる状態の最も広範で包括的な宇宙をわれわれがもたらせるように選択して行為すべきなのである。」

※

ジェイムズの哲学は体系として組み立てられていない。その個々の理論にはプラグマティズムとか根本的経験主義とか多元主義とか世界改善論とか偶然主義とか道徳主義とか有神論といった名称が与えられているが、それらはそれ自身に関して必然的に確定された論理ではな

い。それらの統一はむしろ個人的なものである。それらの繋がり論理的な展開の統一性をもたらしものではなく、一定の生き生きとした価値の維持と増大に向けて協力する思想の合致をもたらしものである。この価値は道徳的なものである。ジェイムズの哲学全体は、あらゆる名称にもかかわらず、本質的には一つのもの、すなわち道徳主義である。ジェイムズの認識論である彼の根本的経験主義もまた、実証主義的な心理主義よりもむしろはるかに道徳主義に属するものである。たしかにジェイムズは心理学者であるが、しかし彼の心理学自体がたんなる魂の説明ではなく、人間の魂の理解でもある。それは、まさにその存在が自発性と個性である具体的で個人的な生活への興味関心なのである。こうしてすでにジェイムズの心理学のうちには人間への一定の道徳的な関係が貫徹している。彼の問題はたんに抽象的な「心理的なもの」ではなくて、人間であり、「主体」であつて、ただ人間的な倫理学だけがそれを認識することができるのである。

この人間、生活、個性は、自らを超えて何かを指示したり、一般的な自然因果性のないしは超越論的な連続性に絶対的に従属しているものではあり得ない。その個性的な個性性はその自由を保証するものである。もしも主体のうちにある全てのものがそれ自身の個性的な生活であり、そのうちには誰か別の超個人的で外部志向的なものは何もないとすれば、真理は超個人的なものを指示することもできず、外部の何かとの一致であることもできず、ただ内的で不可避的に個人的な何かとの一致、すなわち経験それ自身との一致でありうる。全ての真理

とあらゆる現実のかわりに経験がある。生きられるものだけが現実的であり、生きられるものは全て現実的である。生活のうちには超個人的で超個人的な要素が干渉するような場所はない。人間の価値はいかなる先天的なものからも生ずることはなく、超優勢的で超個人的な世界から生ずることはなく、論理的ならびに形而上学的により高度な悪党に委ねられることはない。生活におけるどのような行為も価値あるかたちでか価値なきかたちで報われうるものであり、経験的な生活全体は道徳的なものである。その測り知れぬ価値はそれ自身のうちにあって、それを超えた何処かにあるわけではない。生命、自発性、活動が全ての善なるものの唯一の座である。行為する個性だけが道徳的である。道徳主義の世界は叙事詩的であり、行為と企画と実践の世界である。逆に言えば、われわれの行為と実践の世界は徹頭徹尾道徳的なのである。実践と行動のなかで、生活の防衛と拡大のなかで、日常の平凡さと現実性のなかで、われわれは生きており、そして自らの道徳的価値ある人生を生きることができるのである。「たんなる個人的な」生活からの転向でもなく、より高度に合理的・道徳的な秩序の知識でもなく、個人的な行為と断ちがたい欲求の実践的で闘争的な生活こそがわれわれに道徳的で結局は宗教的でもある経験を開示することができるのである。

おそらくこれが大まかな輪郭におけるジェイムズの道徳主義である。それに帰せられている多元主義、世界改善論と超自然主義的な多神論はむしろ「余剩信念」であり、その道徳主義の果実であるよりも、

むしろ花である。ジェイムズはそれらのいずれも決定的に練り上げられたものとして、世界の最終的な見取り図として提示してはいない。信仰の問題において独断的な主張を行なって、彼によればたんに経験の対象でありうるものを精神に無理やり強制しようとするほど、彼から遠いものはないであろう。ここで問題なのは、宗教は結局はたんに精神に無理やり強制されているにすぎないのではないかということであり、そして信仰はたんなる独断的な主張以上のものを何も必要としないのではないかということである。ジェイムズは預言者であろうとはしなかった。彼の「余剩信念」は結局のところは呼び水であり、刺戟剤であって、全ての人が自分の目的のうちに自分の信念を自分で明らかにしたり、自らの最も内密な欲求の方向のうちに自らの宗教的な確信の方向を発見したり、他ならぬ自らの経験された世界のうちに世界との全ての関係の源泉と基礎を発見しようと努力したりできるようにするものである。

ウィリアム・ジェイムズの哲学全体は、心理学から信仰への意志に到るまで、認識論から宗教的な世界観に到るまで、彼の道徳主義と合致しないようなことは何も語っていない。しかしそれにもなつて議論の性格はプラグマティズムからジェイムズの意見へと転換している。もしこの哲学が道徳的な意志によって徹底的に支えられているとすれば、その個々の主張のいずれの批判と向き合うことも不可能である。ここでは生活を承認することが問題であり、道徳的な勧誘が問題であり、現実の自己のうちに道徳的な欲求を投錯しようとする願うことが

問題なのである。もしジェイムズの世界像が信仰の世界であるとすれば、その信仰は現実と失なわれることなき人間的な価値への確信の感情以外の何ものでもない。彼の哲学は世界を信頼しようとする大なる試みであり、信頼の獲得への闘かいと努力である。しかし人間が心からもたらず内奥のあらゆる信頼は裏切られるものであり、世界へのその信頼感はずぐに打ち砕かれるものである。したがってここでは核心においてはただひとつの解決策が残ることになる。すなわち純然たる信頼はわれわれには与えられてはおらず、獲得されねばならないのである。信頼しようとする全ての感情はただ闘争と実践の成果として現われるべきものであり、勝利と宣告であり、道徳的な業績なのである。世界に関して確信を獲得する唯一の方法は、全力を尽して世界を整えたり、世界のうちで行為したりして、その行為を宣言することによつて世界への最大の確信が存在するようにすることなのである。そして、悪しきかたちで利己的であつたり冷淡であつたりする行為で、それによつてわれわれが実存への自らの確信を形づくることができるような行為は決して存在しないのである。―これがプラグマティズムの基本的な主題であると私は思う。その他の全てのはたんに、世界における人間の行為に可能なかぎりわずかしか干渉しないような宇宙のイメージを獲得しようとする試みである。このようなイメージは、殆んどそう言つてよければ、すでに個人的な趣味の事柄である。そしてジェイムズの世界像はかくも新鮮で絵のようなので、それは「華やぐ知識」(gay scientia)、実践的樂觀主義の哲学という名称が適しいも

のである。

九 結 論

そしてその結論は何か、と読者はおそらく問う。―ここから何が結論されるのか。あなたはいかなるプラグマティズムの理論とも一致しなかつた。あなたはそのうちに、正しいか正しくないかはともかく、一定の道徳的な議論、悪くないモラルを見出したが、それは、私が認めるように、おそらく近代的でもあるが、しかしたんに個人的に打ち立てられたものであつて、必要な証明と説得力ある公準を欠いたものであつた。そこからわれわれのために何を選び出すべきなのか。

読者諸君よ、何も選び出さないか、実例を選び出すかである。それらの諸側面の副題は「実践の哲学」である。しかし実践と実験を持続的に強調し、活動と成功を持続的に強調することは、それによつてプラグマティズムが豊かになつていゝものであるが、この強調は固有の活動的な言葉によるものであり、個人的に自由で率直なアングロサクソン民族の言葉によるものである。これらの哲学者たちの活動的な樂觀主義からは明らかに新世界が語りかけているのである。したがつてここでは全てのはわが民族とわれわれの生活様式に近いものでも親しいものでもない。しかしそれ以上にプラグマティズムは実践の哲学の実例なのである。

私はプラグマティズムを放棄するよりも、むしろ喜んでそれにその自然な思想からのひとつの光を投げかけるであらう。―それはひと

当惑させ、おそらくは事柄をさらに明確にする光である。あらゆる主張は一定の必要に対応している、とプラグマティズムは言う。あらゆる哲学は一定の危機から生じて、何らかの葛藤を取り除くのに役立つものである。プラグマティズム自身は、いかなる必要、いかなる危機と切迫した願望に対応しているのだろうか。さまざまなかたちで重層的な世界から、あらかじめの合意なしに、実践の樂觀主義と実践的な価値への確信を擁護する傾向のある哲学的な個性が現われたのだとすれば、それは何のために必要だったのか。実践と成功への素朴な喜びや活動的な生活への健全な実践的な信頼は、確かにそのような哲学を必要とはしない。そのような哲学を呼び起こしたのは、おそらくはまさに実践の破綻と圧力ではないのか。

多くの人々が語り、また自らの生活によって確認しているところによれば、今日の生活の秩序においてはむしろ実践の過重負担、油切れとあまりに困難な成功、道徳的な疲労の継続について語る事が可能なのであって、この疲労は部分的には無能力と弱さのうちに現われているが、部分的にはいわゆる実践的な人々の圧倒的な利己性のうちに示されている。つまり活動的な生活からの素朴で自明的な悦びよりも、むしろこれら全てについて語ることが可能なのである。実践とは悪しきものであり、自己を破壊するものか隣人を破壊するものであり、時代の進歩とともにつねにひとを満足させるよりも失敗をもたらしている。そして、ここにおいてわれわれは次のように言おう。すなわち活動的な人なら誰でも、自らの実践に専念できるように彼に対して善

意志が作用するという信念によって自分でこの危機を打開しようと試みるのである。それは、この実践において彼はただ物質的な利益以上の何かを求めなければならないという信念であり、この実践のうちに彼は真理と生命の価値と道徳的な満足と世界のささやかな救済さえも見出すことができるという信念である。―そしてそれは、ただ彼自身がこの実践のうちに最大の善と信頼を置くとすれば、の話なのである。したがって実践へのこの確信は決して実践への生まれつきの好みによるものではない。すなわち、あらゆる哲学が素朴さの喪失から生ずるように、実践の哲学もまたそうなのである。

そして、もし読者が自らの実践的な生活について、それはたんに活動的で成功したものでないばかりか、さらに忌まわしく抑圧的で世界の善と繁栄に対して思いやりのないものであるのを見るならば、何故に私が実例としてプラグマティズムについて語るのかを理解するのである。（次号に続く。）